

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	稲吉 昭彦（愛知県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第 8 1 号
学位授与の日付	平成 2 7 年 3 月 1 8 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	中世後期日本における貨幣使用に関する研究
論 文 審 査 委 員	主査 貝 英幸（佛教大学教授） 副査 渡邊 忠司（佛教大学教授） 副査 宮澤 知之（佛教大学教授）

〔1〕論文の概要

本論文は、中世後期の日本における錢貨を主たる対象に、その特質と使用の仕組みを説明しようとしたものである。

構成は、序章、本論、終章からなり、本論は付論を含む全 7 章で構成される。具体的構成は以下の通りである。

序章

第一章 研究史の整理と研究視角

第一節 研究史の整理と問題の所在

第二節 研究視角

- 1 中世貨幣の性格
- 2 中世後期日本の貨幣使用
- 3 金・銀の浸透

おわりに

第二章 「撰錢」の仕組み―「悪錢替」と「悪錢売買」―

はじめに

第一節 撰錢という行為

第二節 悪錢受領の対処

- 1 「悪錢替」の仕組み
- 2 「悪錢売買」の仕組み

おわりに

第三章 錢貨に封を付けること

はじめに

第一節	錢貨に封を付けること
第二節	錢貨に封を付けることと悪錢問題
おわりに	
第四章	緡錢慣行
はじめに	
第一節	緡錢の比率
第二節	緡錢の値
おわりに	
第五章	計算方法
はじめに	
第一節	位取り方式
第二節	比例定数方式
おわりに	
第六章	銀の浸透と貨幣使用
はじめに	
第一節	諸職補任料の支払い状況
第二節	貨幣使用と相場
おわりに	
付論	私札と木綿売買
はじめに	
第一節	私札の構造
第二節	私札の使用と木綿売買
終章	本研究の総括

各章の概要は以下の通りである。

序章は、本論文のねらいと目的、次いで各章のねらいを述べている。

第1章「研究史の整理と研究視角」では、小葉田淳を嚆矢とするわが国の貨幣史に関する研究を概観しながら、本論文が課題とする貨幣使用の特質に関係する先行研究について詳述している。そのうえで、これまでの研究が貨幣そのものに関わる問題と、貨幣と権力や商品流通など貨幣に関連する問題とが分別されないままに論じられてきたこと、とりわけ貨幣の属性を等閑視してきた点が問題点であると指摘する。こうした観点から、本論文は貨幣そのものに注目し、その使用のあり方の解明を主たる課題とし、貨幣使用の仕組みの解明と貨幣使用の実態解明の2点を検討課題とする。

第2章「「撰錢」の仕組み－「悪錢替」と「悪錢売買」－」では、まず最初にこれまでの撰錢に関する研究が、撰錢という行為そのものに対する考察と、撰錢行為に起因する権力や商品流通、地域経済の問題に対する考察が混同されてきたことを指摘し、撰錢という行為そのものの検討が必要であることを述べる。次いで「撰錢」を取り上げ、錢貨使用の現場における「撰錢」行為そのものの検討を通じて、撰錢によって撰びとられた「悪錢」が単に排除されたのではなく、「悪錢替」や「悪錢売買」といった処置によって経済市場に留まり続けていたことを指摘するとともに、錢貨の交換（売買）に携わった商人の存在

について述べている。

第3章「銭貨に封を付けること」は、前章に引き続き撰銭の実態に関する検討である。大徳寺領播磨国小宅荘を例にしながら、隔地間での年貢銭運送の際の手続きに着目し、現地で収納された年貢銭が、撰銭された後に封緘し花押を据えられ送進されていたことを述べる。そして、この銭貨送進の手続きが撰銭の結果を固定する（確定させる）ための処置であったことを指摘した。またこうした行為こそが、悪銭として撰び取られた銭貨が如何にして信用を付与され市場に留まり続けているのか、という疑問に対する解答であるとともに、精銭と悪銭を一定の比率で交換する「悪銭替」が抱える問題を解決する手だてであったことを指摘している。

第4章「緡銭慣行」では、複数枚の銭貨が括られた「緡銭」を実際の銭貨使用の場面において取り上げ、「緡銭」のひとつの形態である「百枚未満の銭を百文とみなす短陌」について考察している。「緡銭」や「短陌」についての先学による様々な理解に対し、実際の銭貨使用の検討を通じて、「緡銭」および「短陌」の特徴を今一度整理・検討している。そうしたなかで、「緡銭」のなかでも異なる銭種が混在する事例に着目し、その特徴および原理について考察し、「緡銭」および「短陌」については、その背景に銭貨の区別立て（階層化）が存在したことを述べ、先行研究の理解が成り立たないことを指摘している。

第5章「計算方法」は、銭貨使用に際して問題となる銭貨の計算方法について検討している。中国で用いられていた「短陌」の計算方法を基礎としながら、中世後期の日本では「短陌」がどのように計算されていたのかを検討している。その結果、中世後期の日本における銭貨同士の交換の場面では、中国宋代にみられた位取り方式と比例定数方式という二つの計算方法のうち、位取り方式のみが用いられたことを指摘している。次いで、比例定数方式は、銭貨と銀（あるいは銀と銭貨）の交換が生じたことによって用いられるようになったと述べ、これは当該期の日本の経済社会が銭貨と銀がリンクした世界へと転換したことを意味すると結論づけた。

第6章「銀の浸透と貨幣使用」では、わが国において金・銀が貨幣として浸透し始める16世紀後半から17世紀前半を対象に、銭貨から銀への貨幣使用の変容について述べている。主要な貨幣が銭貨から銀へと変容する問題については、従来の研究ではその背景や理由の理解が十分ではないとし、北野社の下級神官である宮仕（みやじ）の補任に伴い授受された「補任料」を例に、銭貨と銀の両者が貨幣として用いられる状況を、両者の質的な差異に着目しながら検討している。その結果、慶長から元和年間には、それまで銭建て価格で表示されていた料足の支払いが、米建て価格への換算を経て丁銀にて支払われる方法へと変化したことが確認されることを指摘し、価格表示と支払い方法の変更に生じたことを述べた。

付論「私札と木綿売買」は、河内国若江郡今江村の庄屋文書を用いながら、銭貨使用という問題に関連して、近世初期の木綿売買において庄屋が発行する私札が用いられていた例を検討している。

終章は、これまでの各章でえた成果を要約し、本論文の結論、今後の課題を述べている。

〔2〕 審査結果の要旨

中世日本の貨幣および貨幣経済に関する研究は、単に封建社会における現物経済（ある

いは自給経済)が貨幣経済へと移り変わる様を跡づけるという意味にとどまらない。13世紀から17世紀に至る中世の日本では、国家は貨幣を発行することなく、そのほとんどを中国からの輸入に頼っていた。貨幣経済の根幹をなす貨幣が輸入され使用されること自体特異といわざるをえないが、実際の社会においては、代銭納と呼ばれる租税の銭納や、年貢貢納や商品流通における頻繁な貨幣の送進、それに伴う割符や為替の発達など、貨幣経済に止まらない信用経済の萌芽とも呼べる状況が確認されるようになる。こうした社会経済上の諸現象が、輸入された貨幣によって維持されるという中世日本の経済社会のありようは、現物経済の成熟による貨幣経済の発生・発展という一般的な経済発展の理解からすれば、特殊な発展の結果といわざるをえない。本論文はそうした中世後期の社会経済の解明の起点として、その根幹をなす貨幣の特質および貨幣市場メカニズムの解明に挑んだ意欲的な研究である。

まず最初に、本論文の評価できる点について述べる。

本論文の序章・終章を除いた本論部分は、その内容から銭貨のみを扱った第2章から第5章の前半部分と、銭貨と銀の関係について論じた第6章および付論の後半部分の二つに分かつことができる。このうち前半部分は、個別の銭貨(清銭・悪銭)の交換や送進という銭貨の取り扱いから銭貨の選別や価値の固定について述べた第2章と第3章と、括約された銭貨の特質やその計算方法など集合した銭貨の特質とその取り扱いについて述べた第4章、第5章の二つの部分からなっている。各章は、実際の銭貨のありようについて銭貨使用の各場面に即した形で関連づけられており、これにより当該期の日本における実際の銭貨使用のありようが具体的に明示されただけでなく、その特殊性に論及することに成功している。

なかでも、「撰銭」についての検討(第2章)は、従来ほとんど顧みられることのなかった「悪銭」に着目し、その行方および貨幣交換市場の仕組みを明らかにしており、それ自体重要な成果として特筆できる。また、「銭貨に封をする行為」(第3章)や銭貨交換の際の「緡銭」慣行(第4章)、計算方法(第5章)など貨幣の使い方に関する一連の指摘は、当該期の貨幣使用時の慣行・慣習にまで踏み込んだ重要な指摘といえ、貨幣使用の背景に認められる当該期の貨幣流通の特質にまで及ぶ重大な成果といえる。このことは、昨年(2014年)発刊された当該期流通史研究の総括が、筆者による一連の指摘を「貨幣の故実」と称し、当該期の貨幣経済を考えるうえで参観すべき成果として位置づけた点をもみても明らかである。

こうした成果は、本文中において筆者自らが課題として掲げた「貨幣そのものに注目し、貨幣がいかに使用されていたのかを究明」しようとした結果であった。徹底して貨幣の特質に着目する筆者の検討方法は、日本における銭貨の特質にとどまらず、銭貨を共有する中国における銭貨のありようとの相違点をも指摘しており、日本の銭貨の特質および貨幣市場の異質性を際立たせただけでなく、一方では日本の銭貨が東アジアにおける銅銭経済圏の枠組みに組み込まれていたことを示すことにも成功した。今後の貨幣史研究の展開を考慮すれば、大きな可能性を提示したものとして評価できよう。

また、これらの成果が、筆者による丹念な史料調査および史料の丁寧な読解にあった点も重要である。貨幣史研究を含む流通史研究および社会経済史研究は、現象の理論的な解釈や一般化を指向するあまり、現実の現象を軽視しがちである。そうしたなかにあって筆

者は、断片的な貨幣関係の史料を丹念に蒐集し、その解釈に丁寧に取り組んでいる。その姿勢は、筆者自らが基礎的研究と位置づけた研究内容にふさわしく地道かつ堅実だが、それに加え本論文で用いた史料、すなわち銭貨そのものを知ることができる史料が、当該期の文献史料のなかに散在的に、かつその多くが解釈に困難さを伴うほど断片的であることを考慮する必要があるだろう。本論文の成果が辛抱強く、かつ丹念に史料と向き合った結果であったことを物語っている。

以上の点で評価に値する成果を認めることができる一方、今後さらに追究されるべき課題もある。本研究のさらなる発展の手がかりという意味で、その概略を示しておきたい。

まず第一に、諸事象を実証する史料や事例のさらなる充実が望まれる。

本論文が断片的な史料を丹念に解釈した結果であることは上述の通りであるが、本論文で示された諸事象のなかには依然として現象面の指摘にとどまっている部分が散見される。特に、第5章「計算方法」は、記述の大半が中国における計算方法や近世の和算書を用いた原理の説明に費やされ、そうした原理が当該期の日本社会で存在していたことを示す事例の掲出が不足している。筆者が指摘した計算方法が、同時代の史料によって確認できるか、あるいは13世紀にまで遡る銭貨の輸入とそれに続く銭貨使用のあり方など、歴史的な事実とどう関連するのか、同時代の史料による事例の補足が求められる。

また、本論文の今後の展開を考えたときにも、この事例の補足という点については見逃せない。本論文では多くの場面において大徳寺領荘園の例が論拠とされたが、禅宗寺院は荘園領主としては後発にあたり、荘園公領制の創始期から続く公家領荘園や顕密寺院系荘園とは性格を異にしている。中世における年貢貢納は、収納や送進の各場面において荘園領主により独自性が認められることはよく知られている。また、15世紀以降の社会においては、当該期に進展する地域経済との関わりから、銭貨が地域性を帯びるという理解が一般的となりつつある。こうした当該期の貨幣経済の特徴を考えれば、本論文が指摘をした諸事象は、単に本論文のロジックを実証するだけでは十分とはいえず、当該期における銭貨使用の諸事例はさらに蒐集されるべきであろう。他の荘園領主の場合では、あるいは当該期の日本の諸地域においてはどうかであったのか、当該期経済社会の特徴に即した形で、事例の補足が必要であろう。

次いで、筆者自身による本論文の成果と課題の認識が十分とはいえない点を指摘しておきたい。本論文は検討に際して、貨幣そのものを対象としたが、それは「貨幣経済の展開を解明する」「その起点」(p.3)とするためであり、決して貨幣の特徴を明瞭化することのみがその目的ではなかったはずである。

本論文の最も重要な成果は、銭貨そのものについての考察と、銭貨と権力あるいは商品流通との関係についての考察を分別したところにある。しかしながら、本論文が史料として用いた荘園年貢の送進状や算用状も、荘園領主権力による家産経営の一環として作成されたものであることを考えれば、それ自体権力と切り離して考えることはできないだろう。また、わが国における貨幣経済の歴史を顧みたと、13世紀に始まる「代銭納」をはじめとして、本論文が対象とした14世紀以降の「撰銭」、15世紀以降の銀・銭交換など、重要なトピックスはそのいずれもが権力や商品経済と深い関係を有している。すなわち、銭貨および貨幣経済について考えようとするならば、いずれ幕府や公家などの中央権力や地域権力による商品流通を担う諸階層に対する管理・統制など、銭貨と当該期の経済的な諸問

題についての考察が必要となるだろう。本論文がそれ自体の解明を直接的な目的とせず、銭貨と社会経済の関係を考えるための基礎的な作業であるとするならば、本論文で明らかにし得た諸事項をもって、中世後期の経済社会と銭貨はどのような関係と想定されるのか、当該期の社会をどう理解すべきなのか、さらには東アジアの広い範囲で中国と共通の銭貨が何故に通用・流通したのかなど、今後の見通しを含んでその可能性に言及すべきではなかったか。

しかしながら本論文では、今後の展開を見通すような記述が不足している。もちろんこれは、筆者が本論文の課題を含んだ、今後の展望を有していないことを意味するわけではないが、自らの研究について今後の展望に関する記述の不足は、本論文の意義を貨幣史研究のなかに位置づけ、研究の今後の可能性を明示するという点において、不十分といわざるをえない。

これらの反省点については、今後改める必要はあるものの、あくまでも筆者が自らの研究を今後どう展開していくかの問題であり、日本の貨幣現象をとらえる基礎を示すと同時に、貨幣問題にとどまらない商品経済、社会構造、権力の問題、さらには16世紀以後の世界経済の変革にまで言及できる可能性を含む新たな日本貨幣史を構築する視点を獲得できた評価は覆らない。よって本論文は、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと認める。